

タイトル	方法論的個人主義の行方 2：独創性と進歩
著者	犬飼，裕一
引用	北海学園大学学園論集，137：1-23
発行日	2008-09-25

方法論的個人主義の行方 2

独創性と進歩

犬 飼 裕 一

「ローマ帝国は、対抗者たちの数的優越や政治指導者の無能力などといった外的要因によって破壊されたのではない。その存在の最後の世紀、ローマには鉄の宰相がいた。ゲルマン的な大胆さと繊細な外交術が一体となった英雄ステイリコ¹⁾が、帝国の頂点に立っていたのである。どうしてメロヴィングやカロリングやザクセンの文盲たちにできたことがステイリコにはできず、サラセン人やフン族に対抗することができなかったのか？——帝国はすでに久しく本来のそれではなかったからである。帝国が崩壊したのは、突然襲った一回の強烈な一撃によってではない。民族大移動は、むしろ長期にわたって生じていた傾向の結果すぎないといふべきである。」(Max Weber, Die soziale Gründe des Untergangs der antiken Kultur, 1896)

目 次

1. はじめに
2. 二十世紀風な議論
3. 個人主義という社会像
4. ジレンマや矛盾の反映性と自己産出
(以上136号)
5. 独創性の呪縛
6. 個人から離れる歴史学
7. 進歩史観の名残
8. 個人をめぐる別の可能性

5. 独創性の呪縛

「個人」という観念に出發するカント＝ウェーバーの社会像は、多くの人々に、それを疑うことさえ思いつかせないという点で、すでに論じるに値する対象である。それを、「真の近代化の根幹」と称揚するにせよ、ゾンビのように生き返る思考の呪縛ととらえるにせよ、重要であることに変わりはない。重要であることの背後には、「個人」と密接不可分であるとみなされてきたもう一つの思考様式が控えている。

それは、「独創性」である。「個人」に終始する社会学理論の呪縛は、さらに広い領域を普遍的に支配している「独創性」という観念によって一層複雑な外見になっている。独創的であること、独自であることという至上命題が、人々に一層の複雑化を要求するのだから。誰もが知っている比較的少数の考えが、互いに組み合わせられ、組み合わせが組み合わせられ、さらに組み合わせられて、普通の人間には理解不能な複雑さを獲得する。しかし、それらの経緯を一旦理解してしまえば、毎度同じような手法で繰り返して再生産される議論の

型に退屈さを感じてしまう。どれもこれも、複雑で込み入った外見とは別に、同じようなことをいろいろな言葉を使い分けて言い換えているだけのように思われるからである。

独創性をめぐる強迫観念、それは今日でも、思想を超えた思想、あるいは学問を超越した学問——メタ思想、メタ哲学——でありつづけている。「独創性」は、多くの判断の範囲外に存在している。判断以前の前提とされている。多くの人々がそろって同じような種類の「独創性」について口にすることは、それ自体として独創的ではないのではないのか？ という問題は、棚上げにされる。簡単にいえば、「独創性」そのものの独創性は問われない。「独創性」は、自己言及を禁じている。逆に言えば、自己言及を禁じることで、特定の思考は、思想を超えた思想、あるいは学問を超えた学問——メタ思想、メタ哲学——、さらには、イデオロギーとしての地位を獲得する。

世代的な経験に則していえば、生徒に向かって「自由」について語る教師に似ている。まず最初に、「自由」のすばらしさが語られる。ところが、すぐに自由に付随する多くの条件が説明される。簡単にいえば、「他人に危害を加える自由」は駄目である、あるいは、「教師の主張を批判する自由」も禁止される。すると、肝心の自由とは、それを語っている教師が、日ごろの価値判断を心ゆくまで生徒に言い聞かせる自由であるということになる。たしかに、それは当人にとってすばらしいだろう。その場合、教師は自立した個人であり、おのれの責任で言論の自由を謳歌している。ただし、教師の考えに同意できない生徒にとって、「自由」とは空虚な空証文、あるいは通

貨のように流通する「言説」であるにすぎない。ついでに言えば、教育の場で、この種の問題を深く問い直す自由も推奨されることはない。教師は生徒に向かって倫理を説く自由をもっているが、教師自身の倫理性が自由に問いただされることはあまりない。

同じように、誰もが「独創的な研究」、「独自の思想」を推奨されながら、実際には同じような種類の「独創的な研究」や「独自の思想」が、日を追って精密度を上げながら再生産されていく。

「個人」について何らかの独創的な知見を提示すること、これがこれまでの社会学の学界の趨勢であり、言い換えれば強迫観念でもあった。「個人」を出発点として考えることに対して疑問を抱く人物でも、そうして考えている自分自身が「個人」であり、自ら独創的な個人であることを追い求めることに、なんら疑いを抱くことはなかった。「個人」「個人」「個人」、そして、再度「個人」。……どこもかしこも、同じく「個人」の連呼である。多少意地悪な言い方をすれば、社会学にあつて、「個人」は常に連呼していいいと失われてしまふかけがえのない文化遺産のようですらある。さらにいえば、「個人」と「独創性」は、互いに補強し合いながら、この百数十年以上の間、人々の思考を支配してきた。

もちろん、この種の強い強制力を伴った観念は、しばしば自己目的化する。「個人」は独創的あることを求められ、「独創性」こそが個人の成立条件となる。言い換えれば、「独創性」とは個人のものであり、独創的でない人物は、「個人」とは認められない。

他方で、理論、思想、方法、言説など、学問をめぐる人間の思考には、二つの選択肢の緊張関係が含まれている。一つは、先行する

人々の形（形式、フォーム）を踏襲して、その可能性をさらに探求すること。そして、もう一つは、先行者の形を全否定はできないにせよ、新たな試みを始めることである。「独創性」という規範や価値観にどっぷりと浸かった今日の人々は、単純に問われるならば、後者をより価値の高いものとして推奨するだろう。

しかし、皮肉なことに、学問や思想をめぐる思考の主流は、あくまでも前者なのである。両者のあいだには緊張が生じている。緊張はしばしば人々を進退窮まる状態に陥らせる。ただし、本稿で問題にしたいことは、自らが掲げる価値観を裏切り続ける今日の知的世界の欺瞞や自己矛盾を指摘したり、非難したりすることではない。むしろ、ここで考えたいのは、理論の根拠は理論であり、思想の根拠は思想であり、方法の根拠は方法であり、言説の根拠は言説であり、もちろん学問の根拠が学問であるということである。

人は、独創的であろうとする時、その根拠を必要とする。根拠とは、やはり自分が従事している枠組なのである。独創的な作曲家は、自分が作っているのが「音楽」でなくなることはできない。それをやめたら、作曲家は作曲家ではなくなってしまうからである。「独創的」とであると評価される「根拠」はあくまでも「音楽」の内側にある。今日の、いわゆる「現代音楽」と呼ばれる領域の人々が日々直面している問題がこれである。あらゆる可能性を探求することを要求されながらも、「音楽」であることをやめることはできない。しかも肝心の「音楽」は永年にわたって蓄積されてきた前例が築き上げてきたものである。理論家や思想家も同じである。

そして、「独創性」という規範や価値観をあくまでも信奉したいの

ならば、あるいは理論や思想や方法や言説や学問の外部に何らかの客観的な現実を認識したいのならば、新たな試みを始めるという選択肢を選ばざるをえないということを再確認することである。その上、人は自分自身が直面している何らかの事実——あるいは、現実——について書くよりも、他人が書いた本を読んで書く方がはるかに容易である。ある程度の修練を積めば、それは面倒ではあっても、困難な仕事ではなくなる。学者が書いた注記・参考文献だらけの論文は、注記・参考文献の量が増えれば増えるほど、そこで自ら思考する当人の比率が減少する。長年にわたって取りためたカードや、あるいは膨大に入力されたデータベースソフトを活用すれば、勤勉さと手際よささえあれば、一段落に十個も引用を含んだ文章を書くことは難しくない。しかも、大勢の権威ある著者たちが、これがその理論であり、思想であると自信満々に主張してきた内容なのだから、それらを編集しなおせば、文句なしの「理論」や「思想」が再生産されることは間違いない。ただし、そこに欠けているのは、自分の頭で考えるという不器用で、危険の多い行為である。

「読書は、他人にものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるに過ぎない」というショーペンハウアーの言葉を引用する時、肝に銘じなければならないことは、すでにこの瞬間、自分がショーペンハウアーに考えてもらっているのだという事実である。このことは何度強調しても、強調しすぎることはないほど重要である。

ただし、ここからまた別の落とし穴が大きな口をあけてましかまえていけることも忘れてはならない。それは「独創性」という規範や

価値観をあまりにも重視することで、思考の自由を失ってしまうことである。そもそも、読書という形で「他人にものを考えてもらう」ことなくして、多くの人間は自分が毎日を送っている環境から自由にものを考えることができるだろうか。周りの多くの人々が常識だ、当たり前だ、と主張する考えから離れて思考することが出来るだろうか。例えば、はるか過去に書かれた「古典」は、今現在の常識や思考様式にどつぷりと浸かつて生きている人々に、それらとは別の考え方がありうることを教えてくれる機会である。プラトンを読むことは二千数百年前のギリシア人に「ものを考えてもらうこと」に他ならないが、同時に、ローマ帝国やキリスト教やルネサンスや近代哲学が大量に蓄積してきた知と無関係に考える数少ない機会でもある。もちろん事情はそんなに簡単ではない。古典ギリシア語を直接読むことができない読者は、後年の「解釈」や「研究」というフィルターに幾重にも依存した翻訳に依存せざるをえない。また、たとえ古典ギリシア語を学んだとしても、それは極言すれば、ローマ時代以来の教育と学習の蓄積の上に成り立った「古典語学」の知識の上で読んでいるに過ぎないからである。

もちろん、いかに制約があるにせよ、今日の読者は、プラトンやデカルトやカントの著書の中に、いままで知られていなかった思考を見つけ出すことができるのもまた事実である。平凡な言い方になるが、偉大な著者の書いた名著には、常に汲みつくされることのない着想が潜んでいる。彼らは自分の頭で考えることを選んだ人々であり、それを実現した人々でもある。ただし、偉大な著者を尊敬することと、彼らの存在自体を崇拜することを混同してはならない。

「天才」への崇拜が極限に達した十九世紀や二十世紀に、極端な人々は「独創性」を、無から有を生み出す神秘として考えた。天才は無前提に創造するのだというわけである。しかし、その一方で、その種の神秘が単なる神話であるという認識も広まっていく。誰もが「天才」ということで思い浮かべる人名ですら、重要な先行者によくを負っており、虚心に学ぶなかで、自分の立場や表現を確立していく。それが、近年の芸術史や科学史や思想史、そして他ならぬ理論史、学説史の理解である。やはり「天才」にあっても、やはり先に述べた二つの選択肢の間に緊張関係を観察できるからである。

先行する形を踏襲するのか、それとも新たな試みを始めるのか？むしろ、人文・社会科学の思想史や学説史の領域にあつては、以前から繰り返し問題になってきた難問を、説得力のある形で自らの時代に再帰させることこそが重要な貢献であつたと考えることもできる。今も昔も変わることなく人間や人間の社会を問題にしている以上、多くの問題はすでに以前の人々が、すでに必死に考えてしまっているからである。この点は、新たな研究対象を次々と発見していく自然科学とは根本的に異なっている。逆にいえば、人文・社会科学にあつて、以前の人々がまったく考えもせず、重要であるとも考えなかった問題だけをかき集めて、「これが私の独創だ！」と主張することが仮にできたとしても、はたしてそんな思想や学説にどれだけの価値があるだろうか。むしろ古来万人に共通の問題について、何らかの着想を提供することの方がはるかに有意義なのではないだろうか。

言い換えると、理論をめぐる議論には、常に一つの危険が伴って

いる。危険とは、本稿の冒頭で強調したように、特定の問題が見慣れて陳腐になっていることと、その問題が解決済みであることとを取り違えることである。文字による文章表現を主な手段としていると、文字という表現手段の特性が大きな影響を及ぼす。文字は、一旦書かれると、まとまった形でいつまでも保存される。しかもそれが「古典」「名著」という形で普及すると、人々は同様の表現を繰り返すことが困難になる。繰り返さなくとも、「オリジナル」がいつまでも存在するからである。新人が新著を書かなくても、有名人が書いた昔の本を増刷すればよいからである。このことは、例えば、舞台芸術などと比較すれば際立っている。舞台俳優は評判の芝居を何度でも再演できるし、ピアニストは得意な「名曲」を何度でも演奏する。当然であり、誰も非難しない。それどころか、演じられる端から消滅する舞台は、それが名演であればあるほど、価値が高いほど、そっくりそのままの再演を期待される。

これに対して、特定の理論や思想が一旦文章化され、普及すると、後からこれらの分野に参入した人々は、何らかの形で新しい表現を期待される。ただし、対象となる人間や人間の社会そのものは、それほど大きく変化するわけではない。すると、新しい表現の新鮮さは、単に用語や枠組みの新鮮さに偏ってしまいがちになる。この結果、次々と登場してくる「新理論」や奇抜な用語に目を奪われ、意外な分類に驚き、その紹介・消化・整理に忙しい反面で、肝心の問題についての思考は一向に深まらないなどということが生じてしまう。これはよくあることである。つまり、千年前も千年後も、人間はやはり相変わらず人間でありつづけるにもかかわらず、「人間」を

めぐる議論だけが、しばしば変化してしまう。同じ対象を扱っているが、以前の議論はすべて無効であると宣言することこそが「独創性」であるかのように思い込まれてしまう危険である。

このように論じてくると、当然一つの疑問が沸いてくるだろう。過去の宗教家や哲学者たちが確信をもって請合ったように、「すべては聖書に書いてある」、「論語は読み手の成熟によって無限の知を与えてくれる」、あるいは「ヨーロッパ哲学はプラトンを一歩も出ていない」といった考えに賛成するのか？ という疑問である。それならば、せいぜい二、三百年前に生じたにすぎない社会科学、それどころか百年ほどの歴史しかもたない社会学などは、そもそも成立根拠自体がありえないのではないか？ という疑問である。

これは重要な論点を含んでいる。現に、古い時代の書物が新たな生命を伴って復権することがしばしば起こるからである。ただし、その一方で、根本的には不変であるはずの人間や、それほど大きく変わっているとは思えない人間の社会の、その小さな差異や変化が、社会科学にとっては重大問題なのだと応答することもできるだろう。現に、プラトンに比べて今日の人々が賢明になっているとは言いがたい。また、カントの住んでいた「社会」と今日の日本人が住んでいる社会の相違は、文学や哲学の扱う領域ではそれほど変わっていないともいえるだろう。ただし、社会科学の対象としてはまったく別物のように見える。少し観点を変えていえば、社会科学はこの種の相違点を概念の世界で極大化して成長してきた知の営みだったと考えることもできる。もちろん歴史や歴史学は、この種の相違こそが重要であると強調する知の営みである。

この意味で社会科学は歴史と手を切ることができない。過去の社会と現在の社会の間にある質的な相違——歴史、歴史性——を否定したならば、社会科学は過去の知的遺産に吸収されてしまうからである。他方で、過去の社会と現代社会のあいだの決定的な断絶を強調し、現代社会は過去と異なっており、遠い過去から学ぶことなどできないのだ、といった信念で「理論」を構築することも不可能ではないだろう。ただし、この種の議論は時間の経過による差異——歴史、歴史性——を拒否するがゆえに、歴史、歴史性によってしか説明できない現象を故意に無視しようとするのである。

そして、この種の議論は永遠に変わることないと言われる「自立した個人」に出发し、収束する議論を飽きることなく延々再生産していくのである。

6. 個人から離れる歴史学

他方で、「個人」をめぐる強固な思考習慣は、歴史学においては状況が変わりつつある。中等学校の歴史教科書でおなじみの「カエサル」や「織田信長」といった個人を主人公とした政治史は、中等教育では依然として主流を占めているが、専門の歴史学界ではすでに傍流に退いている。これに対して、個人を越えた「社会」や「経済」を主題とした社会史や経済史が主流になっている。ただし、こういった歴史学の視点の変化が、万全の形で行なわれているわけではないし、欠点がないわけでもない。例えば、独自の視野で新たな歴史観を探究する歴史家の山内昌之は、意欲的な表題を掲げた近年の著書で、次のように書いている。

「社会が発展もしくは変化するなかで、学問の性質も不変でいられるはずありません。歴史学にしても、その例に洩れませんでした。社会発展のなかで他の学問が細分化したように、歴史学にも変容と分業の波が押し寄せました。その結果、トウキョーディデスやランケに反抗して政治的事件の塔を突き崩そうとしたフランスの社会史研究者の目論見は成功したかに思えます。

他方、これによって歴史学は大事なものを失うことになりました。」(山内昌之『歴史の作法』、文春新書二〇〇三年、一六一頁)

失われた「大事なもの」とは、山内によれば、「歴史の先端的性格、政策や経緯の学としての歴史学」であり、「人間の社会や世界の全体を理解しようとする意欲」のことである(山内、同所後続)。言い換えれば、過去の社会で歴史が果たしてきた役割を放棄しつつあるということになる。分業化によって知識の総量や正確さは格段に向上するが、その一方で、他の分野の社会科学者を含めた多くの読者が期待する側面は後退していく。専門外の読者にとって特定の調査対象の微細な個別情報が厳密に正確であるかどうかは、多くの場合重要ではない。それよりも、「……とは何か?」、あるいは「……は……にとつていかなる意義があったのか?」といった問題に取り組んでくれた方が、自らの関心に結び付けやすいし、読んでいて興味をそそられるわけである。もちろん、山内が専門のイスラム史について書いた専門論文よりも、一般の読者は、「歴史の作法」といった表題の著書に興味を抱くのと同じである。

同じ本のなかで、山内は、「フランスの社会史研究者」の意図に抗して、次のように書いている。

「同様なこと」承前・個人に起こった事件が歴史に与えた大きな影響」は、ブルボン朝のルイ十四世を悩ませた痔瘻についてもいえます。太陽王は、腸チフスに罹ったこともあり、持病の痛風に加えて、痔瘻の痛みにも耐えねばなりませんでした。絶対王政の君主の罹った痔瘻の痛みは、夏目漱石の小説『明暗』の津田のように、排泄の度に王を襲ったことでしょうか。あろうことか、侍医は健康に良いという理由から下剤を頻繁に投与しました。年間二百十二回の浣腸と、四十七回の瀉血をおこなったという段になると、持病も歴史における偶然性の領域とはいえないでしょう。激痛が現実の政治にも影響を与えたことは想像にかたくありません。歴史家ジュール・ミシュレは、ルイ十四世の治世を痔瘻に苦しむ前と後に分けているほどです。拡大を続けていた領土は痔瘻を境に縮小し、死ぬときにはもとの国境線近くまで後退していたという笑えない説を残したのです。」

(山内、同書、一五六頁)

簡単にいえば、歴史には、あくまでも「個人」に起因する要因が、個人を越えた「社会」をも大きく変えるといった事例があるではないかということになるだろうか。「痔瘻」というのは、通常の歴史叙述では無視されるような事例である。ただし、通常の歴史叙述が無視するような事例に注目することで、従来にはない視野を獲得することを狙っているのだろうか。別の観点からいうならば、歴史に「身体」を取り入れることによって、「個人」が置かれていた現実之光を当てようとしているともいえる。現に、山内がこのほかに挙げている事例は、「クレオパトラの鼻」や(オスマントルコの)「バヤズイ

トの痛風³」である。

山内の主張をさらに延長していくと、「歴史において、個人(とその身体)とはそんなに無意味なのか?」という疑問につながっていくに違いない。逆に、終始一貫して「個人」にこだわるウェーバーやギデンズのような人々には、「社会学において、社会とはそんなに無意味なのか?」と問いかけることも不可能ではないだろう。

議論を少しさかのぼると、山内が「フランスの社会史研究者」と呼ぶ人々、いわゆる「アナール派」の歴史学者たちは、社会学の成果を歴史研究に積極的に導入することを提唱した。ただし、その場合の社会学とは、個人を超えた次元に存在する「社会」を中心に据えて考えようとする社会学のことである。この意味で、「社会史」と呼ばれる領域は、かなり古典的な意味での「社会学」の考えを取り入れた歴史学であるといえる。人生や過去の人間の歴史は、単に「個人」だけが勝手に作り出したものではなく、他者との関係によって成り立っており、「個人」の思惑を超えた相互関係の複雑性によって成立しているのだ、といった考えを歴史研究に取り入れようというわけである。

その場合、山内が考えている意味での「歴史の先端的性格、政策や経緯の学としての歴史学」や、「人間の社会や世界の全体を理解しようとする意欲」は放棄される。トゥキユデイドスからランケの後継者たちに至る古い時代の歴史学は、過去に実在した偉大な個人を足がかりにして、政治家や権力者の資質を問い、特定の個人にとつての「社会」や「世界」のあり方を問題にしてきた。当時は、歴史家と政治家や権力者の間の距離が、今よりもはるかに近かったのだ

ろうか。あるいは、歴史家の側が一方的に接近しようとしていたのだろうか。反対に、政治家や権力者の側が歴史を愛好し、歴史家を重用したのだろうか。ともかくも、古い時代にあつては、「歴史」は権力にとって最優先の政策課題の一つであつた。

歴史や伝統こそが現存する権力の正当性を確保する唯一絶対の根拠であるといった状況は、今日の人々を完全に納得させるものではないが、いまだに理解の範囲内ではある。政治や権力の領域に限定するならば、いままさに現役の状況が続いている。「昔からそうだからそうなのだ」、ということとで正当化される権力は、けつして力を失つてはいない。地域の繁栄の記憶に結びついた個人の人名は、子孫の世代になつても神通力を発揮し、抽象的な「政策」を掲げる勢力の前に立ちふさがる。難解な概念を並べて理想を語る政治家よりも、有名な政治家の子孫の方が支持を得る。今日の日本社会でしばしば批判の対象となる「二世議員」や「世襲議員」が依然として健在なのは、この意味でも意味深長である。政治や権力の領域で、「個人」は変わることなく圧倒的な地位を占めているのである。

ところが、この種の思考は、今日の歴史学にあつては骨董品の扱いを受けている。歴史学は、アナール派の影響がどうのという次元を超えて、ともかくも「個人」を乗り越えることを至上命題としている。「カエサル」や「織田信長」が活躍する歴史は、時代遅れであり、これらの魅力的な人物の意図を超えた「歴史(過去の社会)」を捉えることこそが高度な歴史学なのだという考えが普及する。

本稿の議論を最初から読んできた読者には多くの説明は要しないだろう。何より面白いのは、一種の逆転現象が観察できることであ

る。二十世紀初頭の社会学の発想が、二十世紀後半には歴史学の主流となる一方で、社会学は個人中心の古い歴史観に似た発想を、手を変え品を変え、何とか守り通そうとしている。トウキョウディエスからランケに至る「個人」に終始する伝統が、なぜか形を変えて社会学で復活しているわけである。歴史学者は「カエサル」や「織田信長」や「坂本龍馬」の自由を時代遅れのものとし、反対に社会学者は個人を越えた「社会」という観念の専横を退け、個人の自由を何とかして確保しようとする。「個人」は「社会」に優先され、「個人」は「社会」の専横に対抗し、自らの「自由」を守り通そうとする。

本稿では、先に「モダニティとは、リスク文化である」というアンソニー・ギデンズの言葉を引用してきた。⁴ ギデンズによると、「リスク」とは、(個人の)行為者(agent)が社会生活を送る上での不確実性のことである。つまり、狭い地域で日常生活を送る人々——個人——ですら、地球規模での(グローバルな)状況の影響を受けざるを得ない社会が登場する。世界市場での原油価格が、メロン農家やタクシー運転手の生活を直接左右する。そんな地球規模での(グローバルな)状況から「個人」の自由を確保しようというのが、ギデンズのような人々が考える「社会学」なのである。そして、この種の社会学は、世界的(グローバル)に名声を確立し、「主流」の地位を獲得している。

歴史学は「社会」に向かい、社会学は「個人」にこだわる。おかげで、歴史学と社会学の著者たちは一般の読者が学問の名前から期待する内容を提供することが困難になつてしまっている。考えてみ

れば、これは不思議な現象である。山内の表現を借りながら多少意地悪な言い方をすれば、歴史学と社会学が、それぞれに変容と細分化を経ていくなかで、広範な読者を次第に失っていく過程がここに観察できるともいえるだろう。それぞれに、一旦決定された路線は、多くの人員を動員し、動員された人員は互いに精緻な分業体制を構築することで、既定の路線を一層強固なものにする。その場合、決まって排除されるのは、他の分野の研究者を含めた「一般の読者」であり、彼らの関心である。同じ路線に従事する人員が多数になればなるほど、「一般の読者」など相手にしなくとも、「研究」は予算を獲得し、「文献」は経済的に成り立つようになる。そして、それらが「業績」となり、過程が循環していく。

これは、立ち止まって熟考するに値する問題である。

「歴史」とは、多くの一般読者にとって「カエサル」や「織田信長」のことであり、彼らが引き起こした名だたる事件のことである。この場合、歴史は日常生活では出会うことのできない過去の偉大な個人や万能の個人を追体験する機会を提供する。複雑化した社会生活の中でがんにがらめにされていると自覚する人々は、今よりも単純素朴とされる社会で、自由にのびのびと活躍する人物たちに自らを仮託し、空想世界でのしばしの開放感や充実感を味わう。いわゆる「歴史小説」「歴史文学」という名で人気を博している文学作品は、まさに読者のこのような要求を満たしてきた。

他方、多くの読者にとって「社会」とは、個人の意図を超えた上位の規範のことである。現に、「社会がそれを許さない」や「社会的責任」といった言い方は、自らの意のままに自由に行動しようとする

「個人」を束縛する規範を意味している。そもそも、十九世紀以来「社会主義」という概念について考えてきた多くの人々は、「社会」を、自分勝手な個人の専横を矯正する存在として想定してきた。個人の利益、金儲けのために勝手放題に陥る資本主義経済に規制を加え、無秩序に秩序を与え、タガをはめる！ といえ、**「社会主義」**にこだわるあらゆる論者は、おそらく反対はしないだろう。一方には経済的強者の立場を悪用し好き放題する個人（資本家）がおり、他方には弱者として不利な譲許を甘受せざるを得ない個人（労働者）がいるならば、個人対個人の力関係の通例として、一方は他方を一方的に支配することになってしまう。権力関係の原因が経済関係であるのならば、経済的な不均衡を是正すれば、本来対等であるはずの「個人」の間に生じた権力関係も自然と消滅するに違いないというのが、二〇世紀の「社会主義」の信念であった。「個人」の暴挙は「社会」が正すというわけである。この場合の「社会」は欲望のままに行動する利己的な「個人」の意図を超え、全体の利益を代弁する存在である。この意味で、マルクス主義をはじめとした社会主義思想は、多くの人々が抱く「社会」という觀念に合致してきたといえるだろう。

ただし、これらの言い方が念頭においている「社会」という觀念は、今日の社会学者が念頭においている觀念からはかなり遠い。言い方をかえれば、多くの読者は「社会（学）」に個人を拘束する社会規範のような役割を求めているのだが、社会学者たちは、個人を種々の社会規範から解放することの方に熱心なのである。

このように論じてくると、過去に「社会」という概念に負荷され

ていた倫理的な判断について想像力をはたらかせることも可能だろう。「社会」というのは高度に倫理的な概念であり、「社会学」という言葉を掲げた最初の人々は、自由な個人を束縛する「社会」を想定することによって、人間社会に「秩序」の介在を論証しようとしていたのだという考えが浮かんでくる。

現に、社会学の歴史にあつては、倫理的な要請は重要な位置を占めてきた。「社会」について論じるということは、多くの場合、実は自らが信じる理想の社会について論じることでもあった。人々は「客観的な社会」について論じているように見せながら、実は「ありうるべき社会」について、より多くの言葉を費やしているというのがこれまでの経過であり、また現状でもある。

ここに、社会学を含めた「社会」をめぐる学問(社会科学)にとつて重大な問題が登場する。すなわち、論者にとって何が「社会」なのか? という問題である。「社会」とは、取捨選択の問題である。端的にいえば、いわゆる「フェミニスト」が考える社会と、「地政学者」が考える社会とはまったく別物である。一方では、男性と女性との関係性(権力関係)こそが「社会」であり、他方では、強固な主体としての国民国家が「国益」を最大化するに当って取りうる合理的選択こそが「社会」とされる。一方にとっては「権力」を弱体化することが課題であり、他方にとっては「権力(＝国益)」を極大化することが課題なのである。フェミニストにとってこの種の「社会」は打破すべき旧弊であるが、地政学者にとっての「社会」は冷徹に行動すべき現実なのである。

この場合重要なのは、それぞれの立場について評価することでは

なくて、「社会」という概念の多元性を自覚することである。そして、「社会」という概念をめぐる構成される種々の社会科学がもっている無数の可能性を排除しないことである。ただし、本来多元的であるはずの「社会」という観念について、特定の型の考え方が支配的な地位を占めていることは忘れてはならない。

先に引用した山内昌之の一文は、今日の人文社会学者が多かれ少なかれ共有している意識を、自らの言葉で表現したものであるともいえる。分業化によって、「木を見て森を見ない」専門家がが増えてしまった、といった一連の議論である。この種の議論は、ただし、注意しないと毎度おなじみの袋小路に入り込んでしまうことになる。自分の狭い専門領域のことしか知らない研究者を批判し、「もっと広い視野で考えろ」、「もっといろいろな領域のことを学べ」と説教したところで、たいして意味はない。なぜならば、自分の専門分野の周りには、やはり同じように専門分化した別の研究領域が広がっているだけだからである。つまり、同じような考えに基づいて分業化、精緻化が進行している多数の領域の知識を苦労して学んだところで、クイズ番組あるいは受験勉強的な意味での物知りにはなれたとしても、それだけのことでしかない。「最新の研究では」といった情報が果てしなく記憶されるだけで、「歴史の先端的性格、政策や経綸の学としての歴史学」は一向に回復しないし、「人間の社会や世界の全体を理解しようとする意欲」がわいてくるわけでもない。専門分化の弊害を強調するあまり、なぜそうなったのかという、もっと肝心な問題を見えなくしてしまうからである。

7. 進歩史観の名残

振り返ってみると、専門分化と視野の狭量化を批判する議論は、決まって一つの約束事を自明のこととみなしている。それは、学問は過去から現在に至るまで一貫して進歩しているという理解のことである。つまり、過去の偉大な著者たちの時代には、人物たちの偉大さに反して学問は未熟であり、これに対し、個々の研究者が小粒になる弊害を伴いながらも、現在の学問はより完成度が高いものなのだという理解である。個人的な印象を記すことになってしまうが、以前からこの種の議論を眼にするたびに印象に残るのは、地を這うように緻密な研究に献身することを自らに課している職人的人物の自負を含んだ自嘲的態度である。一般の読者からは見向きもされず、他の分野の素人には、小粒だ、「木を見て森を見ない」などといわれるが、自分たちがやっている学問は全体としては昔の比ではない高度な水準に達しているのだ！ といった信念が、行間から立ち上がってくる。その上、論者の多くは、毎度同様の批判を繰り返しながらも、歴史学にもあった過去の「英雄時代」への回帰など不可能だと実感している。ランケや内藤湖南が偉いのは認めるが、今はそんな時代じゃないのだというわけである。

ただし、この種の信念とは裏腹に、歴史学は大きな変貌を何度も経験している。人物中心の政治史と数値中心の社会史の相違は、そこで蓄積される知識の点でも大きな断絶を経ているのではないだろうか。つまり、「カエサル」についての綿密な知識と、「共和制末期ローマにおける属州経済」についての綿密な知識とは、年代の上で

重なり合うとしても、かなり異なっているのではないだろうか。もしもそうならば、「カエサル」について研究していた人々の学問が未熟で、「共和制末期ローマにおける属州経済」について研究する自分たちの学問の方が高度であると、単に知識の点だけでも判断できるのだろうか。むしろ、単に、人物史は程度が低く社会史は高度なのだ、という研究者共同体で現在主流の価値判断をそのまま表明しているだけなのではないだろうか。

この推測があたっているとすれば、今現在の価値観で過去を判断するという、近代歴史学最大の禁則を犯していることにならないだろうか。つまり、月給をもらって住宅ローンを払い、ボーナスで新車を買うといった生活をしている人間の価値観で、「カエサル」の人生にみられる計画性のなさや、「中世の修道院」の生活の不条理さを批判するといった時代錯誤（アナクロニズム）を犯しているのではないだろうか。そもそも、自分がおこなっている研究が「近代歴史学」であると自負する人々は、この種の時代錯誤を犯さないことが学問としての歴史学の要件であると信じてきたはずである。

歴史はすべての瞬間において完成しており、それぞれにおいて有意味であり、別の時代の価値観や判断基準によつて評価される必要はない。ランケが「歴史の各時代は神に直結する (jede Epoche sei direkt zu Gott)」という言葉で表現したのがこの原則である。過去はそれ自体として完成されており、何らかの過程の途上でもなければ、準備段階でもない。それぞれの瞬間が完成されており、その時点での複雑な力関係の合力をなしている。「カエサル」や「織田信長」が等身大の現代人として活躍するのは、教訓史や歴史小説や「ビジ

ネス書」であつて、歴史学ではないのだというわけである。ただし、本稿の主題は、現代の歴史学が陥っている自己矛盾について強調することではない。

むしろ重要なことは、この種の進歩史観を一旦取り外して、歴史学自体の歴史性を自覚することである。それには、しばしば繰り返されているような学問の「英雄伝説」を問い直す必要がある。例えば、「ゲーテは万能の百科全書家であつたが、それは十八世紀という、まだ学問が未発達だったころだから可能になったのだ。今の時代にゲーテが生きていたらあんなことは不可能だ」といった形で繰り返されてきた言説を見直すことである。例えば、ゲーテの時代にあつても、それまでに蓄積された知識はすでに常人の手に負えるものではなかったのではないだろうか。現に、今日まで名前が伝わっていない多くの人々にとってはそうだったのではないか。ゲーテはワイマールの宮廷人として後半生を生き、死んだ。「宮廷人」とは、今日の人々にとってなじみのない社会類型である。ゲーテの時代までに膨大に蓄積された宮廷社会の儀礼規範、いうならば「有職故実」について、今日の人間が果たしてどれだけ通じているというのだろうか。どれだけ専門分化して取り組んでいるだろうか。今日の人々はそれらを用いるものとして放置しているが、ゲーテの時代の人々にとっては重要な死活問題だったといえないだろうか。ゲーテから離れて、近代科学が成立する以前のヨーロッパで今よりもはるかに盛んに研究されていた神学上の知識について考えても同じことが言えないだろうか。ケプラーやガリレオの時代でも、中世以来の神学的な説明によって成り立ってきた「自然」をめぐる知識が、すでに個

人の手に余るほど蓄積されていたのではないのか。今日の人々は、それらを無意味なものとして一括して無視しているだけなのではないか。

ゲーテやランケのような人物が偉大であつたのは、多くの知識を広く覚え込んだことによるのではなくて、むしろ既存の考えとは別の考えでそれまでの知識を再度把握したことにあるのではないのか。逆にいえば、今日の人々は、近代以降の学問のあり方に対して、ゲーテやランケが以前の知のあり方に対して抱いたような懷疑を抱かなくなっているだけなのではないか。つまり、いろいろな言葉を使って学問批判をしているながら、根本のところでは、先に記したような進歩史観に満足しているのではないか。

言い方を変えれば、既存の学問のあり方を少し問い直すだけで、分業の細分化など問題にならないような広い視野が登場するのではないのか。分業化や細分化、「木を見て森を見ない」ことを嘆く人々は、実は既存の流儀から離れることを恐れているか、あるいはアンビツァレント^{アンビツァレント}愛憎半ばする感情を抱いているだけなのではないのか。

このことは、例えば社会学や人類学といった新興の学問が登場してきた過程を考える上で意味深い。今日でも、古典的な社会科学や専門歴史家の視点から見ると、社会学というのは他の分野の成果をつまみ食いするいい加減な折衷学問であるという理解が根強い。それどころか、社会学者自身が好んでこの種の自己紹介をすることすらある。自信満々で大言壮語することが研究者の自己認識（アイデンティティ）を支えていることもあるが、長年にわたって受け継がれてきた自虐趣味が習性となつていることもよくあるものである。

る。他方で、二〇世紀の初頭に社会学をはじめたマックス・ウェーバーのような人物の視野の広がり、すでにこの時代においても特異な存在であった。

理由は簡単である、既存の学問と異なった観点から議論を行なうのだから、視野は広がらざるを得ない。広い領域に関連する論理を組み立てたならば、それぞれの領域について議論を展開する必要があるのは自然な成り行きだろう。それは、個別の知識についての習熟度や、知識の正確さとは別の次元の問題である。

今までとは異なった形で議論を始めることは、先行者の業績に依存できない事業である。後追いでない開拓者の苦労は、頼るべき他者のいない無人の野を孤独に進むことに終始する。そんな状況におかれたならば、人間は手に入るかぎりのあらゆる情報を利用しようとするだろう。たとえ、得られた情報が百パーセントは信用でないという可能性をはらんでいたとしても、そのあたりの厳密性は後継者に任せるというのが彼らの本音なのではないだろうか。開拓を志す人物は、しばしば完璧さを得意とする人物と別なのである。

開拓者の仕事に、細かな事実誤認を指摘し、「重箱の隅をつつくような」批判を加えることは、多くの場合不毛な作業である。むしろ彼らの仕事のなかに新しい可能性を積極的に見つけだすことの方がはるかに生産的である。

少し以前を振り返ると、過去にも広い視野を掲げること、歴史学において「個人」と「社会」の間の架橋をしようとする試みが多く、読者の支持を得たことがある。例えば、自他共に認めるようにマックス・ウェーバーに多くを学んだ大塚久雄の経済史研究は、

ウェーバー的な類型論を自分なりに加工して「人間類型」という概念を打ち出すことで、「個人」と「社会」を同一の議論に収めようとした。

「にもかかわらず、経済学の前提となっている人間類型、つまり「経済人」というものがそもそもロビンソンの人間類型から由来し、したがって、その本質的な諸特徴を依然としておびるという事情は、依然として変わっていません。同じことは、おそらく、社会科学の他の諸部門についても言えるのではないのでしょうか。そして、近代以前、あるいは近代西ヨーロッパ（アメリカ合衆国をも含めて）以外の国々、つまり、多かれ少なかれ異なった特徴をもつ人間諸類型や諸文化を研究対象としたばあいには、いまでも、ロビンソンの人間類型にいたりつくまでの未熟な段階としてしか、あるいは、それからの単なる逸脱として処理されがちなのではないのでしょうか。」（大塚久雄『社会科学における人間』、岩波新書一九七七年、六七頁）

つまり、「ロビンソンの人間類型」と大塚が呼ぶものは、ロビンソン・クルーソーという個人であると同時に、共通の属性——倫理的^エ特性——で理解される多数の人間をも示す。特定の経済倫理や生活態度をもった人間は、多数からなる集合体としても、やはり同様の社会的行動を行なうものと考えられる。この意味で、「人間類型」は、まさに「個人」と「社会」をつなぐ橋であるということになる。素朴な言い方をすれば、倫理的な人間が大勢集まれば倫理的な社会ができるというわけである。さらにいえば、「ロビンソンの人間類型」が集まれば、「ロビンソンの社会類型」が生まれ、「経済人（ホモ・エ

「コノミクス」が集まれば、「近代資本主義社会」が成立するのだというわけである。このため、真の意味での「近代化」が実現されるには、近代のエートスを身につけた人間類型が不可欠なのだ、と説明は続いていく。そして大塚の文章に出てくるように、「ロビンソンの人間類型にいたりつくまでの未熟な段階」にある非西欧諸社会の「段階」が説明される。確かに広い視野をもった歴史学であり、社会科学であるともいえる。ウェーバーが打ち出した「類型論」という方法が、時間と空間を越え膨大な歴史事象を比較可能にしている。ただし、この種の議論に関しては、この本が刊行された一九七〇年代までに、すでに賛否両論ともに論じ尽くされているので、本稿で繰り返す必要はないだろう。

もちろん、この種の議論が、まさにマックス・ウェーバーがそうであったのと同じく、「個人」に終始する議論の延長上にあることは改めて強調するまでもない。それは、「ロビンソンの人間類型」という類型の性格を突き詰めて考えていけばすぐに分かることである。ダニエル・デフォーの小説に登場するロビンソン・クルーソーは、一人（個人）で無人島に漂着し、そこで手許にある資源を最大限に確保しながら、しかもそれを最も効率的に利用することで、住民一名——後には従僕フライデーを含め二名——の孤島生活を何とかして豊かにしていこうとする。ロビンソンという個人の行動基準や価値観は一貫しており、迷いが無い。たとえ失敗しても、失敗に学び、繰り返すことが無い。そして、資源は蓄積され、方法は洗練され、生活に余裕が生まれ、考えうるかぎり極小の「近代資本主義社会」が軌道に乗っていく。

しかも、特定の刺激が与えられれば特定の反応が予想できるという点では、この「資本主義社会」は機械のように機能している。ボタンを押せば、機械が作動し、同じ製品が果てしなく出てくるのに似ている。偶然性や不確実性やリスクは排除されるか、最小限に抑制されており、社会は完全に機能する。まさに、完璧な理想実現であり、デフォーの読者は長年この物語を読んで胸のすくような達成感を味わってきた。

ここで、一度立ち止まって、自明の事実を確認するところから考えてみる必要がある。「ロビンソン・クルーソー」の物語は、ダニエル・デフォーという著者の手になる一七一九年発表の文学作品であり、登場人物には実在のモデルがある⁷とされるにせよ、物語を事実（史実）と同一視することはできない。むしろ、作者デフォーが実在の人物の体験に仮託して自分の理想的な生活を描き出したと考える方が自然だろう。つまり、一七一九年に刊行された小説は、このころのイギリスの知識人や広範な読者が理想とした「人間類型」を印象的な形で描き出すことで成功を収めたのである。それは、現実よりも個人主義的な「個人」であり、はるかに自立的かつ自律的な「個人」でもある。しかも、実際の社会生活で直面するさまざまな障害を極力取り除いた理想状態でもある。具体的な事実としては存在しない——かもしれない——が、著者デフォーの思考によって創作され、多くの読者の支持によって存在感を実現している。

三百年近く前に出た文学作品が、その後の社会科学の発展に及ぼした影響の大きさに思いを馳せてみるのも無駄なことではない。文学作品など最初から眼中にない社会学者たちですら究極の「個人」

として仰ぐ観念が、文学的な創作であったというのは興味をそそる。もちろん、三百年前には、今日の人々が考える社会科学など存在していない。例えば、「経済学」の元祖で、「経済人（ホモ・エコノミクス）」を考え出したとされるアダム・スミスが生まれたのは、デフォールの作品刊行後の一七二三年であり、『国富論』を刊行したのは一七七六年であった。

常に進歩していくことを身上とする人々が、なぜか三百年も前の小説の主人公を追いつけている。今日の常識では、「科学」は常に更新され、少し前の議論は「古臭い」とされ、陳腐なものとして扱われる。その半面で、次々と登場してくる斬新な議論が、難しい言葉遣いとは裏腹に、もっと古い観念に基づいていることもあるわけである。

8. 個人をめぐる別の可能性

議論を「個人」と「社会」の問題に戻すと、歴史学が「社会」にこだわっている一方で、社会学は「個人」という名前の幹線レー尔の上をすでに百年近く走っている。そして、両方とも細分化し、分業の分業が高度化して、多少早い時期に枝分かれした領域の研究者とは、まともな議論をすることができなくなっているのも同じである。どんどん分業化が進んで「詳細で確実な知識」や「精度の高い分析」を誇る半面で、少数の専門家以外は興味を抱かない文献を量産しているのも同じである。

ただし、多くの同業者が必死に走っているレー尔から外れて、古い時代の廃線跡を探访すると他にもありうる可能性が見えてくる。

あえて古臭いやり方に戻ること、現在のやり方が陥っている隘路を見通すことが期待できることもありうる。理由は簡単で、異なった方法や枠組みを比較することで、特定の方法だけに依存することによる欠陥が見えてくるからである。しかも、過去のやり方はすでに過去の人々が考え付く大方の可能性を試している。もちろん、昔のやり方をそのまま踏襲しただけでは、昔の人々が到達した地点には簡単には到達できない。以前のやり方でも、今のそれでもない新たな路線の可能性を探ることである。

例えば、イギリスの歴史家・歴史理論家・歴史社会学者ピーター・バークは、「ルイ一四世」という誰でも知っている有名な「個人」をあえて掲げることによって、個人を越えた歴史像を探求しようとする。

「ルイ一四世、フランス国王、かれは一六四三年に四歳で王位を継承し、そして一七一五年に亡くなるまで、七二年にわたり君臨した。かれが本書の主人公である。といっても、本書の目的は太陽王の伝記をもうひとつ提供することではない。すでに多くの伝記が書かれているし、いくつかはすばらしい出来である。他方、この研究はルイ一四世の人となりや王そのものに関心があるというより、かれのイメージに関心をもっている。イメージといっても、かれの自己イメージではない。それはすでに研究者により再構成されてきた。また、後世の人々の目に映ったイメージというでもない。それは別の研究テーマになってきた。本書が焦点をあてようとしているのは、王の公的なイメージであり、人々の集合的な想像力のなかで、ルイ一四世がどの

ように位置づけられたか、ということである。」(ピーター・パーク『ルイ14世 作られる太陽王』、名古屋大学出版会、二〇〇四年、三頁)

本稿では、先に山内昌之を引用しながら、「ルイ一四世の「痔瘻」が歴史に与えた影響」について考えてきた。「痔瘻」を、例えば「急病」に言い換えれば、伝統的な個人中心の政治史が年々取り扱ってきたテーマである。ただし、「個人」の扱い方はかなり異なっている。込み入った書き方は、やはり原著者の慎重さと訳者の苦勞を物語っている。それは今日の世界で、「歴史」と「個人」をいかに共存させるのか? という難問に対して何とかして回答しようとする努力のようにも感じられる。このことは、昔の歴史書と対比してみると印象的である。例えば、今から六十年ほど前に日本で刊行された「西洋史」の本には次のような記述がある。

「このように強固なる王権の独裁国となったフランスは、マザランの死(一六六一)と共にルイ十四世(一六四三―一七一五)の親政時代に入って、専制国家の華麗きわまる活躍を開始する。彼は聖書及び宗教を以って国家権力の源泉として「神佑を受けし最も基督教的なる国王」と称するけれども、それは彼の王権の神授を表わすものであって、決して敬虔の意味ではない。反って身自らは神の如く貴く太陽の如く無常の光榮ある者であつて、正しく「太陽王」の名の如くであり、「余は国家なり」であつたのである。かくて内外の政務は凡て王の一存より出で、凡は王によつて決せられる。闊達、細心、精密にして而かも派手なるはこの王の性格であつたが、よく人材を登用して、財政のこ

ルベール、軍政のルーボア其外有為の將軍たちによつて国家の隆昌と発展とが齎された。」(村田數之亮『概観西洋歴史』、河原書店、一九四七年、二二〇頁、ただし仮名遣他を引用者の裁量で変更)

これはけつしてはるか昔の歴史観ではない。それどころか、少し以前の高校の世界史教科書にも登場していた「西洋史」である。その上、仔細に読んでいくと、単なる史実以上に、多くの情報が含まれている。もちろんこれは、近年の歴史学の常識や、社会理論の領域に詳しい読者ならば、言いたい事山盛りの歴史叙述でもある。

まず、「余は国家なり(J'État, c'est moi)」とは、当人の言葉であるのか否かは別として、ルイ一四世自身の理想の自己像なのだろう。そうでしょう? と尋ねられて、否定するルイ十四世は考えにくい。現に、ルイ一四世は、自らの在世中から、自らを「太陽」として表現することにこだわる。現に、当時描かれた絵画や発行されたコインには、国王の肖像画とともに太陽が描き込まれている。さらに、ルイ一四の意図をそのまま汲んで、「内外の政務は凡て王の一存より出で、凡は王によつて決せられる」という状態(＝理想状態)が、時代の全般的な記述となる。社会の中心問題は政治であり、政治(諸政策)は特定の個人によつて決定される。まさに個人中心の政治史である。

そして、ルイ一四世の宗教観。この著者は、この国王が行なった宗教的行為を評して「決して敬虔の意味ではない」と請合うが、たいてい根拠があるわけではない。プロテスタントを弾圧し一六八五年にナントの勅令を廃止したルイ一四世の精神生活と、政党支持の

宗教法人のご機嫌をうかがう現代の政治家の功利主義を同一視する根拠を挙げることは困難だろう⁸。被支配者、一般大衆の宗教心を利用して己の絶対権力を確立する、といった功利的判断を常に行なう主体こそがルイ一四世——絶対主義の専制君主たち——だったのだという歴史観が、この種の表現を生み出しているように思われる。つまり、絶対主義の専制君主たちは、いち早く宗教が支配する世界観から脱出して、現実政治を生き抜くための「合理的選択」に目覚めていたのだということになるだろうか。しかも、権力者は合理的であり、被支配者はそうではないという理解がここにある。「名君」は常に民衆の意識を一步先んじているというわけである。ただし、この種の、権力(者)を扇の要とした予定調和的な説明はすでに時代遅れとなっている。

もちろん、ルイ一四世の伝記研究は、すでに多く書かれてきている。ヴォルテールの有名な『ルイ一四世の世紀』を筆頭に、フランス本国ではすでにどれだけ刊行されているのか想像するだけ気が遠くなってしまう。分業という点でもやりつくされているのではないか。

ピーター・バークは、ルイ一四世の生涯について細かな事実を跡付け、極端に言えば一日一日の日誌的な情報について検証するといった作業をここで再開するというわけではない。かといって、「ルイ一四世」を括弧でくくり、かつてのマルクス主義史観がやったように、「封建制の最終段階としての絶対王政」の典型ということで片付けるわけでもない。あるいは、「ルイ一四世」を一つの期間をあらわす概念として用いて、「ルイ一四世時代後期における社会生活」を

論じていくわけでもない。

ここでは、歴史的な研究対象において、「個人」を越えた認識を何とかして実現しようとしている。「ルイ一四世」という素材がとりわけ意味深い理由は、少し考えてみればすぐに理解できる。すなわち、「ルイ一四世」は、典型的な「絶対君主」として、権力の中の権力、その代表者と考えられ、この点で疑われることはなかった。以来、「絶対君主」や「独裁者」の呼称を奉られる人物は数多くいたとしても、これ以上に典型的な事例は歴史上多くはない。ところが、そんな「ルイ一四世」ですら、実は個人の意志やとは別次元の構造によって成り立っていたのだと指摘するわけである。このことは、「権力」をめぐる従来の思考様式を、誰もが知っている最も代表的な事例において克服するための思考実験であると考えられることもできる。

常識で理解できる当たり前の問題から考えていくならば、どんなに強力で絶対的な権力者であっても、権力による支配下にあるすべての人々によるすべての行動を一人で操作することはできない。近代国家に比べれば規模の点で問題にならないとしても、それでもやはり「ルイ一四世」の配下には、計測の仕方によるが、数百万から千万の単位の間が生活していた。数百万単位の間が一人の人間が自在に操るなどということはありえない。当たり前のことである。

すると、当然、「ルイ一四世」の名の下に組織されていた「官僚制」の存在に思い至るだろう。「絶対君主」と一般庶民の間には、官僚制が介在しているのだというわけである。ただし、ここまで考えてく

ると、重要な問題に突き当たることになる。それは、ここで当然のこととして登場している「官僚制」(あるいは「官僚」という概念の性質である。「官僚制」とは、特定の人格をもった個人なのだろうか? 多くの人々は、否定的な回答をするに違いない。個人と、多くの個人からなる組織は別物であるというのが常識的な理解である。個人としては個性的で、倫理的な人物が大勢集まって組織を作ると、没個性となり、悪行を犯すのだ、といった説明は、いろいろなところで目にする。「組織の不条理」といった定型表現があり、個人の意図や善意からでは説明できない組織のあり方を説明するものとして、一部の社会学者も愛用してきた。

ところが、官僚制の人格や一体的な性質を否定する人々が、なぜか個人と同等の存在として「官僚制」という言葉を用いるのを目にすることが多いのも事実である。例えば、「組織は、個人とは別の生き物」に類した表現もよく目にする。組織には発生があり、幼年期があり、成長があり、成熟があり、繁栄を謳歌し、(他の組織と)共存し、闘い、衰退し、回復し、滅びる、といった表現も、違和感のあるものではない。

ただし、ここで注意しておかなければならないことがある。それは論述上の手段としての「擬人法」と、概念そのものの性質を区別することである。このことは、社会科学的命題を記述する場合、つねに付きまとう。例えば、「官僚制」という言葉を使って、「改革の前に立ちはだかる官僚制」(「民衆の前に立ちはだかる国家権力」でも同じ)といった記述をするでしょう。すると、この場合、「改革」が二本の足で道を歩いている個人のように記述され、対する「官僚

制」が行く手に両手を広げて立ちふさがっている別の個人であるかのような印象をあたえる。もちろん、この種の表現は、込み入った表現を整理し、叙述に活気を与えるものである。当然新聞などの報道文では頻繁に用いられる。「官僚制」の代わりに、具体的な官庁の部局に属する個々の人物とその行動について延々と記述することは、不可能ではないかもしれないが、現実的ではない。

ところが、この種の表現に慣れてしまうと、擬人法的な「個人」があたかも実在する人格であるかのようにみなされてしまうことがよくある。その結果、多くの概念が物語の主人公たちのように活躍し始める。「ルイ一四世」の例に戻るならば、ルイ一四世は、「絶対君主」あるいは、「太陽王」と呼ばれたり、自称したりすることによって、「官僚制」と一心同体となる。比喩的な表現を使えば、官僚制は王の「手足」であり、王の意図をそのまま具現してフランス王国や当時のヨーロッパ世界全域に影響を及ぼしていたということになるだろう。つまり膨大な人員が特定の意図の下に一糸乱れず行為する「ルイ一四世」なのである。ここには、個人が多数の人員を動員し、支配し、多数の人員が特定の個人の名前で行動するという社会現象が観察できる。この場合、「ルイ一四世」という名の権力機構に属する個々の人員がどのような意図を抱き、それに基づいてそれぞれどのように行動したのかということは、無視されることはないにせよ、相対化される。「ルイ一四世」の意図に矛盾する意図や、行動は、例外であり、特異な事例であり、あえて取り上げるまでもないと判断される。例外的な事例についてかわりあっていたのでは重要な問題に向かうことができないのだというわけである。ここに決定的な

拾捨選択が行なわれる。もちろん、この種の現象は、一七世紀のフランスだけに限定されるわけではない。同じことは、今日の社会科学が愛用する種々の概念についても当てはまる。

先の大塚久雄の議論に戻れば、「ロビンソンの人間類型」(あるいは「経済人」)は、個人であるのと同時に、類型として多数の人間でもある。そして、経済合理的に行動する個人が複数になり、数を増し、社会全体を変革するような大勢力になると、「西欧近代」や「近代資本主義」や「市民社会」と呼ばれる社会が成立するのだというのが大塚の議論であった。

このように単純化してしまうと、多様な歴史学上の知識や難解な術語で語られる議論ではなかなか思いつかない疑問点が目に付くようになる。多くの読者は、大塚の議論が個人の間に起こる相互関係や、組織化によって生じる創発特性を不当に無視していることに気づいているに違いない。しかも、個人と「人間類型」(ロビンソンとロビンソンの人間類型)の間の論理的関係が不明瞭なままである。「ロビンソン」は、ある時には個人として行動し、またある時には「人間類型」として歴史の大きな流れを左右する。いうならば、正体不明の存在者である。

この問題は、大塚だけではなく、大塚が依拠したマックス・ウェーバーの問題点でもある。「禁欲的プロテスタント教徒」は、ルターやカルヴァンのような歴史上の個人であるのと同時に、組織としての「教派(セクト、ゼクテ)」(ルター派やカルヴァン派)でもあり、その種の信仰を共有する社会でもある。もちろん、それらの概念の間を、ウェーバー自身も思いのままに移動して「プロテスタンティズ

ムの倫理と資本主義の精神」を書き上げている。この種の多義的な概念は、説明のための修辞(レトリック)としては便利この上ないのだが、修辞はどこまでいっても修辞であって、論証ではない。

大塚やウェーバーの議論の弱点は、煎じ詰めれば「個人」だけに終始する方法論に起因する。つまり、彼らにとって確固とした存在というのは個人だけであり、個人が集まった社会の問題は、しょせん修辞的なものでしかない。つまり、ロビンソンがロビンソンの人間たちであろうと、カルヴァンがカルヴァン派であろうと、論じるに値するような相違はないと信じているか、そうであると主張したがついているわけである。言い換えれば、彼らの議論には、「個人」に還元できない問題は存在できないのである。

ここまで論じてくると、先に引用したピーター・バークのいう「人々の集合的な想像力」という概念が、大塚やウェーバーの議論とは異なった方法に基づいていることが見えてくる。つまり、この場合、ウェーバーにとって論じるべき対象はルイ一四世という個人であり、これと同一視される「ルイ一四世」という名の権力機構であった。一方、バークはルイ一四世当人の意図とは別に「ルイ一四世」を成り立たせている仕組みを問題にしようとする。逆にいえば、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、ルターやカルヴァンが何を考えたのか、どういう主張をしたのかということは間違っても外すことのできない論点である。ところがバークにとってルイ一四世がどういう人物で、どういう信条の持ち主であったのかということは、二次的な問題でしかない。ルイ一四世自体は相変わらず魅力的な存在ではあるが、もっと重要な

のはどのようにして「ルイ一四世」という権力機構が成立していたのかという問題の方なのである。

他方で、特定の型の修辭（レトリック）や語り（ナラティヴ）が実は人々の思考そのものをも方向付け固定してしまうという理解は、すでにかなり以前から論じられてきた。逆にいうと、人間が「思考」と呼んでいるものの正体は、社会的、あるいは文化的に形成された特定の型や規則（ルール）からなる「ゲーム」であるという考えがこれである。とりわけ言語の役割の大きさに注目する人々は、プログラムされ ヴィトゲンシュタイン以来の「言語ゲーム」という言葉を飽きることなく愛用してきた。哲学や社会科学を含めたあらゆる言語による探求は、どこかに実在する真理や事実を究明するのではなく、あくまで括弧入りの「真理」や「事実」といった概念をめぐる規則や型を共有する上で成り立っている「言語ゲーム」でしかない。だから、肝心なのは、どこにあるのかわからないし、究明できる見込みもない「真理」や「事実」について難しい理屈——別の規則による言語ゲーム——を編み出すのではなく、見なれた日常生活で実行されている言語ゲームの規則（ルール）を明らかにすることなのだ、というわけである。「言語論的展開」というのも、彼らのおなじみの合言葉である。

言語は「真理」や「事実」を究明するための手段ではなくて、それ自体のために再生産される目的なのだという洞察がここにある。この種の議論が面白いのは、必然的に自己言及構造をはらんでいるからである。ヴィトゲンシュタインが「言語ゲーム」について論じたことは、当人が発表した著書やそれらについて論じた文献につい

ても当てはまらざるをえない。つまり、「言語ゲーム」論をめぐる言語ゲームや、「言語ゲーム」論をめぐる言語ゲーム」をめぐる言語ゲームが延々と飽きもせず続けられていくきっかけが、ここに成立しているのである。

ただし、しばらく「ゲーム」を続けていると、誰かが「もう飽きた！」と言いはじめる。おそらく人間の思考は、同じゲームの単純な繰返しに「飽きる」という態度を示すように仕組まれているようである。ヴィトゲンシュタインの議論が画期的だったのは、従来の哲学が真顔で取り組んできた「探求」が、実は「ゲーム」であったと喝破したところにある。「主体」と「客体」という古くからの哲学的二分法が、ここで否定される。「言語」は、特定の「主体」のために奉仕する道具ではなくて、それ自体を再生産することを目的とする。日本語や英語といった自然言語の「ゲーム」は面白半分の余興といった語感になるが、ヴィトゲンシュタインの追隨者たちの暴露趣味を取り除いていえば、「芸術」という用語の方が的確だろう。芸術は、特定の約束事（ルール）に依拠しておこなわれる表現のことである。つまり、哲学者たちは、自分たちの哲学者共同体の内部で作られ出し、長年共有してきた約束事に沿って「哲学」を再生産してきたのだということである。それは、作曲家や演奏家が特定の様式に従って曲を作り、演奏するのと同じである。カント主義者は「カント主義」という様式に従って「哲学」を作曲し、マルクス主義者は「マルクス主義」という様式の「哲学」を演奏し続けるわけである。そして、方法的個人主義に立つ社会学者たちも、「方法的個人主義」という曲を作曲し、飽きることなく再演しつづけてきたの

である。

ただし、この種の喝破、あるいは暴露には、決定的な弱点がある。それは、自分自身も自らの論理から逃れられないという自己言及性である。現に、ヴィトゲンシュタインの追隨者は「言語ゲーム論」という様式の「ゲーム」を続けてきた。「ヴィトゲンシュタイン」の名を掲げた本の多くは、決まって同じボタンを繰り返す。世上に流布する価値観の多くは、「ゲーム」であり、他でもない自分（たち）には「ゲーム」の本質を喝破する能力があるのだ、というわけである。もちろん、理論的には、この種の言明も「ゲーム」でなければならぬ。その半面で、各々の論者が抱いている価値観や時代意識のようなものは、ちゃっかりと「ゲーム」とは別物として別室に避難させていることが多いのは面白い。言い換えると、自分の価値観に反する勢力の言葉は「ゲーム」とされる一方で、自分の属する共同体の考えは古典的な意味での真理というわけである。難解な哲学用語で装飾した議論は、時に鮮やかな手際で現状を分析しているように見えるが、しばらく時間がたつと「二重基準」が目立つてくる。もちろん、少し古びた著者たちの本に、そのあたりの「二重基準」の在り処を明らかにするゲームも面白い。論理の詰め将棋といった楽しみである。ただし、この種の議論を「ゲーム」としてもてあそぶ以外の可能性を探究することも忘れてはならない。とりわけ、「二重基準」と本稿の主題である「個人」が密接不可分につながっている場合、新たな問題が発見できるに違いないからである。

(つづく)

1 フラウィウス・ステイリコ (Flavius Stilicho 三六五―四〇八年) は、西ローマ帝国の軍人。「半蛮族」の司令官として斜陽の西ローマ帝国を支えた。父親はヴァンダル族出身のローマ軍人、母親はローマ人。テオドシウス一世の下で同国の軍事的中心として活躍したが、帝国分割後の西ローマ皇帝ホノリウスの命令で処刑される。

2 ショーペンハウアー『読書について 他二篇』、斎藤忍随訳、岩波文庫一九八三年、一二七頁

3 山内、同書からの引用。

「オスマン・トルコのバヤズイト一世（一三六〇―一四〇三）の痛風の方が、ルイ十四世の痔瘻よりも歴史の因果関係をよく説明してくれるかもしれません。一三九六年にブルガリアのニコポリスで十万のキリスト教徒連合軍を撃破したバヤズイトは、北上を続けてローマの聖ペテロの祭壇に供えられた燕麦を、トルコの馬に食わせると豪語したものです。バヤズイトのドイツやイタリアへの進軍を妨げたのは、通風の長く苦しい発作だったとギボンは述べています。ギボンは、使徒の奇跡も起さず十字軍も阻止に失敗したバヤズイトの進軍を頓挫させた原因を痛風の発作に求めました。」（一五六―一五七頁）

4 ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ』、秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ハーベスト社二〇〇五年、四頁。

5 現に、ウェーバー自身の知識の正確さについて正確な知識を掲げる研究者の側からの検討が種々行われている。ただし、この種の仕事は、「偶像破壊」に従事する人々にしばしば見られる下品な暴露趣味に傾きやすい。具体例としては、次の文献を挙げれば十分だろう。羽入辰郎『マックス・ヴェーバーの犯罪』、ミネルヴァ書房二〇〇二年。

6 『ロビンソン・クルソーの生涯と奇しくも驚くべき冒険』(Daniel Defoe 1660-1731, *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, 1719)

7 デフォアの小説のモデルとされているのは、スコットランド人の水夫アレキサンダー・セルカーク (Alexander Selkirk 1676-1721) であり、一七〇四年、この人物は船内での争いごとによりチリの沖合にあ

るマス・ア・ティエラ島に取り残され、一七〇九年に救助された。

8 むしろ、その種の冷徹さに欠けていたことこそが「ルイ王朝」のその後の衰退を公平に説明しているように思われる。

9 ただし、「ナラティヴ」や「レトリック」をめぐる近年の議論が、そのまま歴史学者の研究活動に影響を与えているのかというところ、そうでもない。たとえば、カルロ・ギンズブルクがうまくまとめている。

「歴史叙述をそのナラティヴ的なレトリック的次元に還元してとらえようとするところから出てきたいくつかの懐疑論的テーゼが、ここ二、三十年來、広く流布することとなっている。もっとも、あとで見ると、それらのテーゼのルーツはさらに古いところにあるにしてもである。総じて、それらの懐疑論的テーゼを提出している歴史叙述の理論家たちは、歴史家たちが具体的におこなっている仕事が多様なものであるかについてはほとんど顧慮していない。しかしまた、歴史家たちのほうも、現在人口に膾炙している「言語論的転回」とか「レトリック論的転回」なるものに申し訳程度の敬意を表することはあっても、自分たちの職業のもつ理論的意味あいについて反省をめぐらせようとすることはほとんどない。方法的反省と歴史叙述の現場でおこなわれている実践との断裂が最近二、三十年間におけるほど際立ったものとなったことは珍しいのではないだろうか。その断裂を克服する唯一の道は、懐疑論者たちの挑戦を受け止め、最も広い意味におけるドキュメント「記録資料」と接触しながら仕事をしている者たちの観点により明確な表現をあたえるようこころみてみることでないかとおもわれる。わたしがとうとうとしている解決策はナレーション「叙述の作業」とドキュメンテーション「資料的裏づけの作業」との緊張関係をそのまま研究の現場に持ち運んでこようというものである。それは理論家と歴史家のあいだの和解を提唱するものではない。わたしの解決策はたぶん双方をとにも不愉快な思いにさせるものであるだろう。」(カルロ・ギンズブルク『歴史・レトリック・立証』、上村忠男訳、みすず書房二〇〇一年、二―三頁)

理論と実証(現場)の分裂は、もちろん両者がある程度の均衡を維持している社会学の領域の方が著しい。理由は簡単で、歴史学の場合は、理論部門が微力だからである。とりわけ日本では、マルクス史学が弱体化して以来、先に引用した山内昌之のような試みを除いて「ゼロである」と断言しても反論する人は少ないだろう。これに対して、社会学の場合は、学問の成り立ちからして理論を不可欠とするところがあるから、弱体化が指摘されつつも理論家が存在する。このため、理論と実証(現場)の分裂は「社会学」について語る場合の決まり文句のようなものになっている。そして、いろいろなことが「原因」として論じられてきた。社会学の分野でよく見られる原因論は、理論分野がいつまでも人文科学——哲学や文学や芸術——とのつながりを断ち切れないのに対し、実証分野は、より確実な「科学」としての高度化を経ているのだといった実証分野の人々の言い分である。言い換えれば、実証の人々が「理系化」を推し進めている間にも、理論の人々は二十世紀前半のような思弁的、あるいは哲学的議論を脱し切れていないというわけである。これに対する理論家の反論は、ここで繰り返すことはしない。これに対して、歴史の分野ではこの種の議論すら起こっていないのが現状であるといえる。

ただし、歴史と社会学の「現場」を多少なりとも観察した結果、私がかかっていることは、多少異なっている。私見では、むしろ重要なのは、「実証」や「検証」といった領域が、それ自体として独立した産業を成り立たせているという事実である。いわゆる「理系」の分野でも事情は同じであると聞くが、机の上で「理論」を考える人々はそれほど多くの研究費を必要とするわけではないのに対し、巨大研究・実験施設——ビッグ・サイエンス——で働く大勢の人々は、まさにどれだけあっても常に不足するほど多額の費用を必要とする。そもそも、理論領域と実験領域とは人員の数でも大きな開きがある。そして、近年流行の「業績数値主義」で計測するのならば、勝負は最初から見えている。一人毎年一本の論文を書いたとしても、数十倍の開きが出てしまうだろう。研究者の数も論文の数も少なく研究費も大してかからない「理論」は、突き放した地点から眺めている行政や企業にとって

は、なくともよい無駄な領域であるということになってしまいがちである。しかも、「理論」の人々は、仕事の性質上、一致団結して自分たちの利益を守ることが難しい。彼らは互いに批判し合って身動きがとれなくなってしまうからである。他方で、膨大な研究者を抱え、それに応じて一系乱れず多量の「業績」を上げている実験系は、「研究費」という形で獲得する収入の点でも、費やされる支出の点でも、「理論」など完全に無視できる、それ自体が自足した産業なのである。もちろん、この種の議論は、理科系の領域では「ビッグ・サイエンス」批判として、かなり以前から論じられている。状況は、社会学でも、また大勢の調査員を動員して行われる「史料調査」を身上とする歴史学でも同様であるに違いない。この問題については、下記の拙稿で、アメリカ社会学とヨーロッパ社会学の関係から立ち入って論じたので、参照されたい。犬飼裕一「コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種」上中下、『北海学園大学学園論集』、一三三―一三五号、二〇〇七―二〇〇八年。